

# 意見陳述

原告 加藤 浩道

私は原告の加藤浩道です。1945年7月22日、後志管内喜茂別町で生を受けました。物心ついてからは、毎年自分の誕生日のすぐ後に原爆投下や敗戦があり、歴史的出来事とともに年を重ねていくことに気がつきました。のんびりとした田舎暮らししながら、いつも物不足でノートや鉛筆を買うにも事欠き、早く困らない生活が送れる社会にならないかと思つていました。エネルギーについても鉄腕アトムを見て、いすれタバコくらいの大きさのバッテリーで車が動き、スースケースくらいで列車や飛行機も動かせる世の中になると思つていました。

しかし実際には、原発は爆発を制御しながら発生させた熱で水を沸かし、タービンを回して電気を発生させるというただの巨大な湯沸し器だと知り、本当に驚きました。それでも原発の危険性を感じながら安全で伝につられ、まさか自分が生き

ている間に大事故は起こらないだろう。何より物にあふれた今の快適・便利な生活は手放せないと深く考えず見過ぎていました。



にはならぬないと確信してしまった。

七

であれば、私は道民の一人として、少しでも泊原発は廃炉と

「靈長」が核の火持ちて  
愚かなり  
破滅への道 止めねばならぬ

人類は二足歩行や言葉の発達とともに火の使用と道具の

の決断を促すために何ができるのか、何をすべきかを考えた時、

人類は二足歩行や言葉の発達とともに火の使用と道具の

ところがその原発がブケシマで2011年3月11日に壊れ最悪の大爆発まで起こしました。その様子を見て、東北はおろか日本が全滅ではないかとさえ思いましたが、一方では力の抜けた気持ちになつたのも事実です。それは何故かと言いますと、あの光景と現場の決死の作業、20万人近くの避難民など、事故の過酷さを実感したなら全ての原発が廃炉への動きとなり、これからは原発事故の不安から全国民が解放されると思ったからです。また、再生可能エネルギーへの開発も急速に進んでおり、様々な考えがあつたとしても国民はもちろん電力会社も政府も再稼働への動き

いします」と事故後からずっと今も看板を掲げています。節電の協力なれば再稼働は当然だと言わんばかりです。

北海道の産業をエネルギー面から支え発展させてきた北電が、道民の心配や不安をよそに、ただただ利益のみを追求するとても残念な企業になってしまったように思います。経産省でさえ北海道の電力供給は原発が稼働していないなくても十分余裕があると言っています。

(2016年)

今や原発は経済的にもお荷物になっているのに止めないのは、止めるべきだと判つていながら止めることができず、止めた時の禁断症状への緩和策も持たない中毒患者を思わ

買い込みと全国に設置をさせてしましました。しかしその「文明」の象徴的産物でもある原発は、フクシマの事故で史上最大の公害として文明の破壊・人類の破滅にも直結する多くの人は気づきました。あくなき利潤の追求と野望による惨事だったとおもります。

先日、北電社長の泊原発の運転期間20年延長発言などは重大な問題を抱えたままでとても正気の沙汰とは思えません。より多くの人の泊原発廃炉の意思表示が必要と痛感しました。



加藤さんが自分でデザイン、作成した  
ティッシュ。  
街頭でみなさんに手渡ししています。

関頭でのひと時に」渡りしていります。

重大な問題を抱えたままで、とても正気の沙汰とは思えません。より多くの人の泊原発廃炉の意思表示が必要と痛感しました。